

# 高垣眸作品研究序説

藤 沢 毅

## 一、はじめに

私の専門は日本近世文学（江戸時代の文学）です。また、出身は群馬県前橋市であり、尾道はもちろん広島県からも遠く離れた所からやってきたわけです。そんな私が尾道を学問する——尾道学としてどのようなものを対象としていけばよいでしょう。私が特に探究している分野は読本（よみほん）、通俗軍書といった江戸時代の後期のエンターテイメント。尾道という地名が登場することはあっても、作品の舞台となることはまずありません。平田玉蘊や、その関係からの頼山陽などは、近世の人物ではありませんが、私の専門対象ではないのです。

そこで、最初に捻りだしたのが、尾道に実在した人を描いた作品として、拳骨和尚こと物外不遷の文学を考えてみることにしました。というのも、拳骨和尚は明治期の講談で大きく採りあげられ、全国にその名を広めたのです。講談は通俗軍書とも関係が深く、また話をおもしろくするための創作や誇張などがあり、たいへん興味深く考察いたしました。<sup>(注1)</sup> 講談の拳骨和尚は、その後の文学に引き継がれて描かれ、近年では津本陽の『拳豪伝』<sup>(注2)</sup>があり、この作品は漫画化もされております。

その次に試みてみましたのが、下垣内和人先生より尾道大学に寄贈された膨大な地方俳諧資料「下垣内文庫」の調査から、尾道の俳諧についての考察です。すでに下垣内先生のなされた

ことを確認するだけの作業に終わってしまいました<sup>(注3)</sup>が、私個人としては大変に勉強になりました。

さて、それでは次にどうしようと考え、実は前から興味があり、少しずつ資料を集め、作品を読んでいた高垣眸作品に、いよいよ取りかかることにしたのです。高垣眸は尾道出身の児童文学作家です。高垣眸作品は、勸善懲惡タイプのエンターテイメントという意味で、江戸時代の読本と通じる点があるのではないかと常々思っておりました。とは言っても、先ほどから申します通り、私の専門は日本近世文学。高垣眸作品は近代文学のもの。どうしても基礎知識が足りないのです。

作品を考えていくには、どのようなテキストがあり、そのテキスト成立当時の読者の視点でそれぞれを評価するべきである、というのは私の基本的な文学研究のスタンスです。高垣眸作品を考えるには、高垣眸作品のテキストが成立した当時の読者に視点に立つだけの知識が必要です。社会背景、文学史、こういった知識は研究者が長い時間をかけて調査し、身につけていくものです。要するに、本格的な高垣眸作品研究は、私には不可能なのです。

そこで、私の立ち位置と目標を最初に宣言しておきます。一つには江戸時代の文学研究の視点をうい、エンターテイメント性の共通点を考えること。もう一つは、現在の、あるいはこれからの学生層に高垣眸作品のおもしろさを伝え、研究の入口を示しておくこと。この二つです。今後、高垣眸作品で卒業論文を書いてみようという学生が出てきてくれることを楽しみに待つことにします。

## 二、テキスト(一) 全集

高垣眸作品はこれまでどれだけ研究対象になってきたでしょうか。国文学研究資料館のホームページに置かれている電子資料館の「国文学論文目録データベース」で検索をかけてみましょう。キーワード「高垣眸」で調べることによって、関連の論文が示されるはずですが、なんと、ヒットしたのはたった一つ。佐藤宗子氏による「高垣眸『宝島』再話の挑戦―プロット再生の可能性」(『千葉大学教育学部研究紀要(人文・社会)』48。二〇〇〇年二月)のみでした。エンターテイメント性が強く、児童向けの作品ということもあって、まだ文学として研究対象になつていないと言えない様子です。<sup>(注5)</sup>

その一方で、高垣眸全集が出ていること、また児童文学の全集に収録されていることは、高垣眸作品が評価されているという一面を示しています。まずはその高垣眸全集を見てみましょう。

### 『高垣眸全集』(桃源社)

第一卷(一九七〇年) 「銀蛇の窟」<sup>ダイヤモドものがたり</sup> 「夜光珠綺譚」

第二卷(一九七〇年) 「龍神丸」 「神風八幡船」

「豹の眼」 「曼珠沙華」

第三卷(一九七一年) 「大陸の若鷹(九曜星)」

「怪傑黒頭巾」 「マグナの瞳」

第四卷(一九七一年) 「まぼろし城」(まぼろし城、

荒海の虹、渦潮の果)

「地獄の代官」 「南海の密使」

第五卷(未刊)

「裾野の火柱」 「謎の花簪」

「蒙古騎銃隊」

「黒潮の唄」 「日本男児」

「空をとぶなぞ」 「紅玉の冠」

「凍る地球」 「燃える地球」

第六卷(未刊)

予定では全六巻だったようですが、五、六巻は出ていないようです。この辺の事情もこれから調べていかねばなりません。四巻までの収録作品数は一五(「まぼろし城」を三つに分けて数えれば一七)。未刊の五、六巻を入れると二一になりますね。それにして「全集」とは良いながら未収録作品が多いことは一目瞭然です。<sup>(注5)</sup>

『高垣眸全集』の第六巻に収録される筈だった「凍る地球」は、『少年小説大系』の中の『高垣眸集』に収録されました。また、同大系の『少年翻訳小説集』には、高垣眸訳の「宝島」が入ります。この大系に収録された高垣眸作品は以下の通りです。

### 『少年小説大系』(三一書房)

第五卷『高垣眸集』(一九八七年)

「怪人Q」 「黒衣剣侠」

「荒海の虹」 「裾野の火柱」

「凍る地球」 「恐怖の地球」

第26巻『少年翻訳小説集』(一九九五年)

「宝島」

どのような経緯があったかは不明ですが、三一書房は、桃源社の『高垣眸全集』の収録作品を意識して、そこに収録されなかった作品を自社の『少年小説大系 高垣眸集』に収録したようです。その一方、『高垣眸全集』発行から『少年小説大系 高垣眸集』が発行されるまでの間にほろ出版から出された『日本児童文学大系』の第20巻『山中峯太郎 高垣眸』（一九七七年）には、既に『高垣眸全集』に収録されていた「銀蛇の窟」が入ります。このあたり、出版社の思惑あるいは姿勢というのが現れているようです。

さて、全集出版には、単に読者に作者単位で読むことのできるテキストを供給するということに止まらない余慶が生じます。まず『高垣眸全集』既刊四巻には、それぞれ巻末にこの全集発刊のため高垣眸自身が執筆した文章が付けられたのです。第一巻『銀蛇の窟』には「銀蛇の窟」「夜光珠綺譚」のころ、第二巻『龍神丸』には「額田六福の想い出と「龍神丸」」、第三巻『怪傑黒頭巾』には「怪傑黒頭巾」誕生秘話・その他」、第四巻『まぼろし城』には「隠密シリーズその他」というタイトルのもと、それぞれ高垣眸が各作品が執筆された当時の思い出などを語っているのです。もちろん、その文章内容を全て「真実」と考えることは危険ですし、そうしなければならぬ必要はまったくないのですが、それでも最初のテキスト成立当時を知る材料としては貴重な資料です。

また、各巻には月報が付けられました。第一巻には『少年世界』編集長として「銀蛇の窟」「夜光珠綺譚」を掲載した新井弘城氏が、第二巻には「竜神丸」の挿絵を描いた山口将吉郎氏が、第三巻には文芸評論家の尾崎秀樹氏が、第四巻には児童文

化研究家の上笙一郎氏が、それぞれ文章を寄せています。そこには当時の作者の様子、出版界の様相、高垣眸作品の魅力などが語られており、これまた価値のある資料となっているのです。

『日本児童文学大系 20 山中峯太郎 高垣眸』の巻末には、尾崎秀樹氏による「高垣眸解説―人と作品―」と磯貝勝太郎氏による「高垣眸年譜」、さらに同じく磯貝氏による「高垣眸参考文献」が収録されています。『少年小説大系 第5巻 高垣眸集』の巻末には、高橋康雄氏による「解説」とやはり「高垣眸 年譜」（『日本児童文学大系 20 山中峯太郎 高垣眸』収録の磯貝氏作成の「高垣眸年譜」を参照した、とある）が収録されています。また、月報には「泣き虫黒頭巾―わが父の思い出―」というタイトルで、高垣眸の次男である葵氏の文章が、また文芸評論家の二上洋一氏による「自由人・高垣眸」という文章が掲載されており、これらは後進の者にとっては大変ありがたい資料となり、高垣眸作品研究の礎となっていくものなのです。

### 三、テキスト（二）単行本

全集類があるということは、それまでに発行されたテキスト群が評価されているということです。では、次に全集刊行以前と以後に発行された単行本の様相を垣間見てみましょう。

まず試みに「日本の古本屋」というサイトで、高垣眸に関するテキストがどれだけ古本屋さんの間で出回っているのか見てみましょう。「尾道学講座」で講座を持つ前日の二〇一一年一〇

月四日に検索をかけたところ、四六五件ヒットしました。ちなみに、この原稿を書いている二〇一二年五月一〇日にも同様の検索をかけたところ、偶然全く同数の四六五件がヒットしています。ただし、内訳には相当違いがあります。いわゆる「出入り」が多くあり、つまり本が買われ本屋さんから「出」ていくこと、また古本屋さんが新たに仕「入」れたことが、頻繁に行われているのです。

二〇一一年に検索をかけた結果の方で、もう少し様子を見てみましょう。ヒット件数四六五の中、前章で紹介した全集はどのくらい入っているでしょうか。

『高垣眸全集』（桃源社）

- 第一巻 12件
- 第二巻 13件
- 第三巻 6件
- 第四巻 7件
- 全集揃（一〜四巻） 11件
- 全集一〜三巻 2件
- 『少年小説大系』（三一書房）
- 第5巻『高垣眸集』 15件
- 第26巻『少年翻訳小説集』 4件
- 『日本児童文学大系』（ほるぷ出版）
- 第20巻『山中峯太郎 高垣眸』 8件

右、合計七八件でした。四六五から七八を引くと、残りは三八七ですね。では、残り三八七件の中で、一番多い書名は何

か、と言いますと、それはやはり『怪傑黒頭巾』で計九四件ありました（ちなみに、二位は『豹の眼』の五二件、三位は『まぼろし城』の三八件です）。この九四件の内訳を見てみましょう。ただし、残念ながら各古書店の判断に基づいた記載であり、また「日本の古本屋」でも統一された記述事項が定められているわけでもありませんので、この内訳は不確実なものです。まあ、参考のために、くらいで考えてみましょう。

講談社（大日本雄弁会講談社）を含む

- ① 一九三九年版 1件
  - ② 一九四〇年版 2件
  - ③ 一九四一年版 1件
  - ④ 一九六五年版 2件
  - ⑤ 一九七〇年版 9件
  - ⑥ 一九七五年版（少年倶楽部文庫7） 54件
  - ⑦ 一九五五年（少年クラブ8月号付録） とうかい絵物語 2件
  - ⑧ 一九五五年（少年「クラブ」付録） 痛快時代絵物語 1件
- ポプラ社
- ⑨ 一九四七年版（名作選1） 3件
  - ⑩ 一九四八年版（名作選1） 4件
  - ⑪ 一九五三年版 1件
  - ⑫ 一九五五年版 2件
- 第三文明社
- ⑬ 一九八九年版（少年少女希望図書館14） 8件
- 普通社
- ⑭ 一九六二年版（名作りバイバル全集8） 4件

(ビデオ)

⑮ TOEI VIDEO 爆発篇 一九五九年公開作品 1件

こうした記載は、基本的には刊記からの情報なのでしようが、本屋さんによつては「版」と「刷」を混同してしまつてゐる所、復刻版にもかかわらず元の版の年を記載してしまつてゐる所があります。また、どうも刊記に記載している情報が既に怪しい本があるようなのです。<sup>(注6)</sup>

『怪傑黒頭巾』の初出は、一九三五(昭和一〇)年一月から一二月にかけて『少年倶楽部』に連載されたものです。そして同年(一月?)、講談社(当時は「大日本雄弁会講談社」)から出版されてゐます。<sup>(注7)</sup>つまり、二〇一一年一〇月四日の時点での「日本の古本屋」には、一九三五年に刊行された『怪傑黒頭巾』はなかったということになります(『少年倶楽部』は揃いではありませんが、出品されてゐました)。それでも、①の一九三九年版のもののはさらに高く二件とも一五〇〇〇円、③の一九四一年版は六五〇〇〇円でした。本の値段は、古本屋さんによつて違いますし、また本の現在の状態(例えば、破れていたりすると安くなりますね)によつても変わりますが、それにしても高価な印象があります。それだけ欲しい人がいるということであり、つまりそれだけの価値があるということなのでしょう。一九三五年版が出たら、いくららの値がつくか、楽しみのような、怖いような<sup>(注8)</sup>。

①から⑧までをご覧のように、出版社としては講談社からのものが一番多く、その中でも⑥の一九七五年の版である少年俱

楽部文庫7のものは五四件ありました。よく売れたのでしよう。実際にはこの版で刷を重ねたようで、「日本の古本屋」の各書店記載の中にも「第〓刷」との情報を盛り込んでゐるものもありました。⑦と⑧は同じものなのかもしれない。これは各書店の記載方法が違うことにより判別できなかったものです。講談社から出たもの以外では、ポプラ社、第三文明社、普通社からのものがありました。

なぜこんなことに拘るか、疑問に思われている方もいらっしゃるでしょう。実は、文学研究にとつて、対象テキストを知ることとはとても大切なことなのです。自分が何か作品を読む時には、テキストを使用します。現在ではパソコンや携帯電話の画面で読むということも可能ですが、基本的には目の前にある書物であつたり、あるいは書物をコピーした紙ベースで読むことになるかと思ひます(コピーの場合は、元の本がどのような本であるかが問題になります)。書物で読んだ場合、その書物がどのような書物なのかを把握し、自分はその書物そのものを対象として評価するのか、あるいは、その書物を読む行為から、別のものを評価するのか、考えねばなりません。書物によつて本文が違ふことはよくあることですし、極端に言えば、表紙の絵から、あるいは本の状態から、読んだ印象が変わることだってあります。「怪傑黒頭巾」を読むとして、初出の『少年倶楽部』連載の文章を評価するのか、一九三五年版の単行本で評価するのか、それが手に入らないのであれば、どのテキストを使用し、どの評価をするのか、を考へてみる必要があるのです。挿絵の有無、位置なども重要です。例えば、『高垣眸全集』では、挿絵はなく、口絵部分に、別のテキストにあつた挿絵の一部を

写真で入れているだけです。単行本のもので大きく印象は変わり、読み方まで変わるかもしれません。ですから、書誌学——その書物がどのような書物であるのか正しく認識すること、その書物がどのような書物であるのか正しく記述すること——が文学研究に必要なことになってくるのです。

話をもとに戻します。「日本の古本屋」によって概観したところ、高垣眸作品は現存テキストがたくさんあります。これは、たくさん読まれたということを意味します。また、研究上、ある程度諸本調査の必要があるということもわかりました。しかし、一つには、こうしたテキストを全て蒐集することは金銭的に難しく（蒐集したいいくつかのテキストを写真で紹介し、文章の後に載せますので、ご参照ください）、また二つには「日本の古本屋」にないテキストもたくさんあります。時間をかけ、図書館で閲覧したり、あるいは所蔵者に見せていただいたりして調査していくことも必要になってくるでしょう。

とは言っても、やはり文学研究の一番の楽しみは、テキストを読み、その内容を吟味し、おもしろさを分析することです。高垣眸作品はたいへん魅力的なエンターテイメントであり、現代でもその魅力は十分読者に受け入れられるかと思われまふ。諸本の調査をしながらも、こうした「読み」をやっつけていきたいと思ひます。

#### 四、各作品あらずじ

##### ——ミニ「高垣眸文学事典」をめざして

さて、最初に申し上げましたように、私自身が本格的な高垣

眸作品研究をするつもりはありません。「江戸時代の文学研究の視点を問い、エンターテイメント性の共通点を考えること」は、細々と続けていくつもりですが、もう一つの目標として挙げた「現在の、あるいはこれからの学生層に高垣眸作品のおもしろさを伝え、研究の入口を示しておくこと」のために、以下のような作業をしていきたいと思ひます。これは、言つてみれば、「高垣眸文学事典」の項目を執筆するかのよう、各作品の初出、諸本をわかる範囲で書き留め、またあらずじをまとめおくことです。あらずじをまとめおくこと、どの作品がどんな内容であつたか、すぐに結びつけることができ、研究の前段階で作品を紹介する際にも便利です。おまけに「キーワード」として、恣意に選んだ特徴のある語を抽出しておきました。これは、複数の作品に共通する要素を概観する際や、また研究の切り口を考える際にも役に立つのではないのでしょうか。

とりあえず、一〇の作品について掲載してみました（なお、以下の雑誌掲載年、書籍発行年の記載については、便宜上、元号中心の表記にしておきました）。

【電神丸】（りゅうじんまる）

【初出】『少年倶楽部』大正一四（一九二五）年四月〜一二月号に連載。

【諸本】大日本雄弁講談社（昭和一〇）、ポプラ社（昭和二九）、講談社（少年倶楽部文庫、昭和五二）。『高垣眸全集』二（桃源社、昭和四五）に所収。

【あらずじ】徳川時代末期、土佐の国蹠蹠の岬の髑髏岩に近づき、海賊船電神丸の秘宝を探す黒潮の万右衛門、しかし宝は

なく、その在処を記す紙片も石崎の灘右衛門が奪う。その紙片を長崎で切支丹の松右衛門が奪う。さらにそれを猫鮫の八兵衛が奪う。万右衛門、灘右衛門、松右衛門は手を組む。彼らの元親分である明王丸の九郎右衛門は、カムチャツカ半島の片隅で、自分の木原の吉右衛門に本物の宝の在処を示す紙片を渡し、子分の松右衛門は、九郎右衛門の妻を攫い、その子竜太郎に両親を殺したのは吉右衛門だと教えこむ。しかし、真実を悟った竜太郎は吉右衛門とともに宝を探しに出かける。その船を襲う万右衛門たち。しかし彼らを返り討ちにして、竜太郎たちは秘宝を目指して航海を続けた。

【キーワード】 秘宝、村上水軍、八幡船、宝の祟り、南京手品師、南京小僧、高島秋帆、眠り薬、黒犬、伴天連の妖術

「神風八幡船」(しんぷうばはんせん)

(改題名「青銅髑髏の謎」《からかねどくろのなぞ》)

【初出】『少年倶楽部』昭和二(一九二七)年一月〜一〇月号に連載。

【諸本】『青銅髑髏の謎』偕成社(昭和一六)、ポプラ社(昭和三〇)。『高垣眸全集』二(桃源社、昭和四五)に所収。

【あらすじ】 竜神丸の秘法を探しに旅立った竜太郎たちであったが、手下の裏切りによってばらばらとなる。海坊主の蛸八は、十字架の銀兵衛を頼って行くが、船幽霊の血九郎に殺される。銀兵衛は、秘法の間所を解く鍵となる青銅髑髏を用い、阿蘭陀館に潜入。唐人船の長五郎、その子・唐子の三吉とともに、地下牢に捕らわれていた大王崎の雁右衛門を救い出す。イギリス船の急襲によって阿蘭陀船は大破。血九郎は、向疵の鱧

八と手を組み、宝を目指す。竜太郎に退治される。天竺狸々(オランウータン)を味方に、やはり宝を狙うイスパニアの海賊ロドリゴオも加わり、三つ巴の争奪戦となるが、傷ついた天竺狸々が火薬を爆発させ、ロドリゴオ一味は全滅。宝を前に争う竜太郎と銀兵衛であったが、雁右衛門の仲裁もあり、銀兵衛は改心。竜太郎は新しい八幡船の頭として、世の中のために宝を用いることを誓う。

【キーワード】 村上水軍、毒蛇、船長シーボルト、おうむ、南京人厨夫、催眠術(メスマリズム)、英艦暴拳事件、髑髏地蔵、天竺狸々、ニトログリセリン、玻璃天井、八幡船

「銀蛇の窟」(ぎんだのいわや)

【初出】『少年世界』昭和元(一九二六)年一〇月〜三年一二月号に連載。

【諸本】平凡社(少年冒険小説全集、昭和四)、ポプラ社(『銀蛇の窟 山の巻』『銀蛇の窟 海の巻』昭和二三)、光文社(『銀蛇の窟 人形箱の秘密』、昭和三〇)。『高垣眸全集』一(桃源社、昭和四五)に所収。

【あらすじ】 人形遣いの月右衛門と銀之助は、聖徳太子由来の銀蛇の窟にある宝のありかが隠される人形箱を持つため、熊野の山の仲間から追われている。青桐新九郎に斬られ、盲目となった月右衛門は、燐兵衛に助けられながら銀之助と逃げる。十津川上流の地に金兵衛を訪ねていく月右衛門たち。月右衛門は甲賀衆に捕まり攫われる。銀之助は動物と話のできる杜吉とともに修験者白竜より修行を受ける。男装の少女・琴音は、寒心こと物外和尚の協力もあり、父の仇の一人である芹沢鴨を討

つ。銀之助、杜吉、琴音、燐兵衛は五重塔に幽閉された月右衛門を救い出すが、黒猫小僧の放火により、銀之助が火傷を負う。熊野灘、太地組の風太郎は大鯨を追い、土佐の国に流される。幽霊船に這い上がった風太郎は、切支丹の海賊たちに捕らえられるが、熊野海賊の千右衛門とともに船を爆破し、脱出する。吉野川上流に住む国栖の民のもとに月右衛門と銀之助が逃げ込むが、甲賀衆が襲いかかる。太地組を襲った古座組に対し、千右衛門とともに太地組が復讐する。銀之助、杜吉、琴音は黒猫小僧により、人買い船に売り渡される。人買い船に切支丹海賊の新しい髑髏船が衝突、銀之助たちが捕まる。燐兵衛と黒猫小僧は小舟の上で格闘。海に投げ出され、岸に流れ着いた二人だが、燐兵衛は黒猫小僧の命を救ってやる。十津川上流の金兵衛の元に、月右衛門、国栖の民が集まる。銀之助たちと燐兵衛は海賊に追われるが、黒猫小僧が恩返しに自爆し、彼らを救う。甲賀衆に撃たれた新九郎だが、人形箱を金兵衛に渡す。甲賀衆を旧熊野党の衆が倒し、倒幕と王政復古のために宝を使用することを誓う。

【キーワード】人形箱、聖徳太子、熊野党、妖精溪、大墓、甲賀衆、修験者、新撰組、物外、隠形の秘巻、鯨取り、髑髏、幽霊船、切支丹の海賊、鉛山の廃坑、国栖の民、人買い船、勤王

「豹の眼」(ジャガーのめ)

【初出】『少年倶楽部』昭和二(一九二七)年一月〜二月月号に連載。

【諸本】大日本雄弁講談社(昭和二)、東光出版社(昭和二)、

普通社(名作リバイバル全集、昭和三七)、講談社(少年倶楽部文庫、昭和五〇)、国書刊行会(復刻、昭和六〇)、『高垣眸全集』二(桃源社、昭和四五)に所収。

【あらすじ】サンフランシスコ発の船・黒太子号に乗り組んだモリー(黒田杜志)は、船に捕らわれていた少女錦華(チンホア)を救うが、重傷を負う。張爺(チャンエー)は二人を導き、ボートで脱出、また船を爆破する。モリーはインカ帝国の王室の末裔であり、その秘宝の鍵「王位の指輪」を持っていたが、それを兇賊・豹(ジャガー)が狙っていた。豹の手から逃れ、リマ市に上陸した三人。モリーは徐々に回復したが、錦華が攫われる。王(ワン。清朝の皇族・慎親王)は錦華(実は王の娘)を奪還するが、錦華は死笑病の毒を注射されていた。モリーと張爺は豹の神殿にて豹と会うが、死笑病の解毒薬との交換条件に王位の指輪を要求される。豹一味はサーカスの猛獣を街に放つ。王は豹の基地に忍び込み、豹に死笑病の毒を注射する。豹の眼は義眼であり、そこには「カパッチ王の碑」が隠されており、王位の指輪と合わせることでインカの秘宝の場所がわかるようになるのであった。豹は滝に飛び込み自害する。

【キーワード】インカ帝国、秘宝、少林寺拳法、死笑病、デュカン探偵、秘密結社、ジウドウ(柔道)、阿片

「夜光珠綺譚」(ダイヤモンドものがたり)

【初出】『少年世界』昭和二(一九二七)年三月〜三年三月に連載。『少年世界』廃刊のために中絶。昭和四五年『高垣眸全集』刊行時に加筆完結して収録。

【諸本】『高垣眸全集』一(桃源社、昭和四五)に所収。



【あらずじ】一七〇三年、ヨハンはローマ法王より賜った夜光珠を持ち、キリスト教布教のために日本へ渡る。一三年後、ヨハンは日本で牢に繋がれていた。隣の牢には切支丹信者として捕らえられた、手品師の江戸川桜とその弟子の都と錦がいた。都は改宗し釈放、桜は死刑となり、ヨハンは病死する。鶴吉の秘薬により仮死状態になった錦は墓に埋められるが、鶴吉に助け出される。都は山九郎の悪の誘いに乗り、江戸川一座を復興させる。鶴吉と錦を追う、与力の塩谷平四郎。錦は足を負傷し、鶴吉は撃たれてしまう。人買いの治郎助と珊瑚兵衛が争い、錦は夜光珠を手に入れる。山九郎と都が結びついていると知った、軽業師の銀太郎は江戸川一座から抜け、錦を捜す。人形師鶴斎は、同じ長屋に住む浪人とその娘・砧の危機を救う。都はこの浪人の娘であり、砧の姉であった。錦は銀太郎と合流、下総行徳に住む。都は鶴吉と錦（実は人形）の姿を見、罪の意識に苦しむ。山九郎と争い、硫酸を浴びる都。山九郎も失明し、自滅。広徳寺で鶴吉と錦、銀太郎が合流。塩谷平四郎が急襲するも、都が錦を人形とすり替えて逃がす。錦は西国大名大友肥前守の娘であり、その協力のもと、鶴吉とともにオランダ船に乗り密航。ローマに着いた都は足の傷口に隠していた夜光珠を法王に返却する。

【キーワード】ローマ法王、悪魔、切支丹、手品、胡蝶襲、人買い、西国大名、草双紙、人形、物乞い、麦藁細工、濃硫酸、蔓珠院、桐ノ木灰、琉球、密航

【まぼろし城】（まぼろしじょう）

【初出】『少年倶楽部』昭和一一（一九三六）年一月〜四月号

に連載。

【諸本】大日本雄弁講談社（昭和一二）、ポプラ社（昭和二三）、普通社（名作リバイバル全集、昭和三七）、講談社（少年倶楽部文庫、昭和五一）、国書刊行会（復刻、昭和六〇）。『高垣眸全集』四（桃源社、昭和四六）に所収。

【あらずじ】信濃・飛騨に住む山棲族の頭領・霧右衛門は、あやしい山城を作る一味に攫われる。山城の主は小西行長の遺児・寿安。城をまぼろし城と名付け、徳川幕府への謀叛を企んでいた。霧右衛門の子・桐作は名馬・白を売ろうとするが、寿安らに奪われる。江戸の隠密・木暮月之介は一味に変装し、まぼろし城に潜入するが、寿安に見破られ、桐作とともに逃亡。寿安は霧右衛門の妻と娘を急襲し、「秘宝山絵図」を奪う。寿安は絵図の謎を解くため、白山の梧平行者のもとへ向かう。一方、月之介は先に白山に到着、寿安を騙し、絵図を奪還する。梧平の持つ神鏡によつて絵図の謎は解き明かされる。將軍献上のための馬と引き換えに、人足五百人がまぼろし城に入るが、その中には山棲族の掠十が忍んでいた。月之介、桐作、その他山棲族たちがまぼろし城に攻め込み、寿安は月之介に斬られる。まぼろし城は全滅し、霧右衛門らも救い出される。月之介は次の任務のため、佐渡に向かう。

【キーワード】白い鬮腰の仮面、黒衣、白衣、小西行長、寿安、秘宝、柳生流、忍術、剣侠、隠密、メスメリズム（催眠術）

【新版大岡裁き】謎の花簪（なぞのはなかんざし）

（改題名「探偵奇談」怪人「かいじん」、謎の象牙簪「なぞのぞうげかんざし」）

【初出】『少女倶楽部』昭和一二（一九三七）年七月号付録。

【諸本】『探偵奇談』怪人 偕成社（昭和二二）、『謎の象牙簪』ポプラ社（昭和二八）。『高垣眸全集』四（桃源社、昭和四六年）に所収（題は「謎の花簪」）。

【あらすじ】松平伊予守の屋敷で、阿蘭陀船長紹利（ローザス）の通辞丸山珊瑚郎が殺され、南蛮渡りの花簪が落ちていた。続いて阿蘭陀医熊井玄洞も花簪を握った死体として発見される。北町奉行中山出雲守時春と南町奉行大岡越前守忠相は將軍の命を受け、犯人探しにあたった。永代橋墜落の際、水中に投げ出された浪人・館清之助は何者かに助けられるが、その男は花簪を残して身を隠した。唐物問屋・天竺屋藤造が殺され、花簪が残される。その下手人として持っていた花簪を証拠に清之助が北町奉行所に手に捕らえられる。大岡越前守は与力たちと投網漁に出かけ、船頭を連続殺人犯・生月島の竜太郎として捕らえる。老中松平伊豆守の前で、対決する両町奉行。以前、清之助を水中で救ったのが竜太郎であった。竜太郎の告白により、殺された者たちは不知火丸をはじめとする元密貿易船の賊であり、竜太郎は愛した女性百合絵とその叔父銀兵衛の敵討ちとして殺人を犯していたことがわかった。清之助は越前守の同心として取り立てられ、竜太郎は死刑。だがその実は越前守の計らいで密かに逃がされていた。

【キーワード】阿蘭陀、西班牙、異国人（混血児）追放、切支丹、鯨漁師、清之助妹香代、百合絵、昼行灯

「ダイアナの瞳」（だいななのひとみ）

【初出】『少女倶楽部』昭和一五（一九四〇）年四月〜同一六

年三月号に連載。

【諸本】偕成社（昭和二六）

【あらすじ】元和二年、女歌舞伎の一座を率いる村雨梢太夫のもとに、異国人追放から逃れてきたイスパニア人フランシスコが迷い込む。梢の父は大江兵庫。父娘ともにクリシタンであった。フランシスコは梢にダイヤモンド「ダイアナの瞳」を渡し、死ぬ。同心青地三九郎は梢たち一座を異人を匿ったことと、クリシタンの疑いで捕縛する。牢の中、梢は弟子である雫に、雫は小西行長の娘である露姫であることを告げ、ダイアナの瞳を渡す。梢は放免され、乞食村の時右衛門らに助けられる。転びバテレン、ジャン・コックスこと小楠寿安は悪人たちとダイアナの瞳を探す。雫はダイアナの瞳をとび松という少年に奪われる。歌舞伎一座の道化役者玉吉は、牢を抜け出し、梢に仮死状態になる薬を飲ませる。死体として運び出された梢を玉吉が救う。薬を調合したのは大坂の陣を生き延びた真田幸村であった。悪人たちが奪いあうダイアナの瞳を、歌舞伎一座の若衆錦也が取り返す。小西行長の家臣であった河合十兵衛のもとに逃げこんだ錦也を、三九郎や寿安が襲う。が、そこに幸村や時右衛門らが駆けつけ、錦也やそこにいた雫を助け出す。幸村、梢、雫（露姫）、錦也、玉吉らは豊臣秀頼のいる薩摩を目指して船出する。ダイアナの瞳は新天地開拓の費用として使われるであろう。

【キーワード】梢、寿安、小西行長、クリシタン、二人静、ビルゼンマリア、十字架、ヨハキン兵庫、マダリナ梢、念珠（コンタス）、フェルジナント国王、カピタン、八門遁甲

「疾風月影丸」（しっぽうつきかげまる）

【初出】『小学六年生』昭和二四（一九四九）年一月〜二月号に連載。

【諸本】ポプラ社（昭和二五）。

【あらすじ】京都清水寺参詣の帰り、山霧一座の太夫・梢は新徴組の隊士に絡まれるが、虚無僧に救われる。この虚無僧は、梢の父であり、密貿易で手配されている月影丸の銀右衛門であった。月影丸を追う目明かしの木津屋丈八は梢を攫い、古屋敷に監禁する。山霧座の松寿は、月影丸を兄の敵と狙う望月駒太郎と出会い、ともに梢を追う。丈八たちは松寿と駒太郎をも襲うが、月影丸が救う。一方、梢は屋敷の火事を機に逃げ出し、松寿と巡り会う。月影丸は、牢に入れられた山霧座の座長・唐兵衛を救い出す。駒太郎は、兄の本当の敵である此木治郎衛門（柴治作）を討つ。月影丸は磔刑に処せられようとする梢を救い、西郷吉之助に匿われる。薩長土肥連合の時が近づいていた。

【キーワード】梢、新徴組、南禅寺、鎖国の悪法、勝海舟、坂本竜馬、西郷吉之助、中村半次郎、白癩の偏僕婆、狂女、白痴、曼珠沙華

「怪奇黒猫組」（かいきくろねこぐみ）

【初出】昭和二八（一九五三）年八月、ポプラ社刊。

【諸本】ポプラ社（昭和二八）。

【あらすじ】切支丹の妖術を使う黒猫組が、城から軍用金と宝剣霧降丸、「隠形の秘巻」を盗む。その際に香月三左衛門、その子右馬之助は斬り殺される。祖父と父の敵を討つため、千

代太郎が旅立つ。返り討ちになるところを、老仙・雲霧仁左衛門が救う。陽炎の銀二郎と木鼠の忠吉は、駒形の関所から遠眼鏡を盗み取る黒猫組を目撃し、その遠眼鏡を奪うがすぐに奪い返される。千光寺の小坊主・曼念は相撲で勇力を顕し、友人の鳥刺しの竿作とともに、銀二郎、忠市と知り合う。黒猫組によつて千光寺から黄金の本尊仏が盗まれる。千代太郎は仙界で修行、雲霧より「飛剣」を与えられ、同じく「無増無減球」という鉄丸を与えられた菊童とともに山を下りる。黒猫組の手下に襲われるも飛剣と鉄丸によつて逃れた二人は、やはり黒猫組に捕まっていた少年・河童の皿吉を救い出す。鋤柄宿の大秋市で南蛮手品を興業する天々斎天瑪理を黒猫組が襲う。天瑪理は北極星の生まれ変わり、千代太郎、菊童、皿吉、銀二郎、忠市、曼念、竿作は北斗七星の生まれ変わりであり、天縁の八人が揃うことで、黒猫組頭領の黒猫九郎右衛門に対抗できるのであった。九郎右衛門の隠れ家である庵織山の鬼の洞穴に乗り込む八人。雲霧の援助もあり、苦難の末、黒猫組を全滅させる。

【キーワード】切支丹の妖術、北辰一刀流、雲霧仁左衛門、術網、婆羅門直伝の波羅蜜多の妖術、猿の赤ん兵工、水相撲、千光寺、蜂の巣突き、伊賀の忍術者・畔柳九郎右衛門、天縁の星形、北極星、北斗七星、生まれ変わり、少林寺、術比べ

## 五、おわりに

いかがでしょうか。拙い考察と作業ですが、これも最初の一步としてご海容いただければ幸いです。今後は以上のような作

業を継続し、また学生に紹介していくつもりです。市民の皆様には、尾道文学談話会などを利用し、「江戸時代の文学研究の視点を用い、エンターテインメント性の共通点を考えること」の成果を逐次報告していくつもりです。

最後にお願いをして終わりにいたします。高垣眸作品のテキストをお持ちの方は、見せていただけませんか。高垣眸研究の促進のために、皆様のご協力をお願い申し上げます。

注

(1)二〇〇六年一月二日に行われた二〇〇六年度「尾道学講座」第3回「文学の中の拳骨和尚」で講演。またほぼ同内容を拙稿「講談本の中の拳骨和尚」（『尾道大学地域総合センター叢書1 尾道の芸術文化』所収。二〇〇七年一〇月、尾道大学）に執筆しました。

(2)初出は山陽新聞ほかで新聞連載。単行本は『拳豪伝』上・下（一九八五年、講談社）、また文庫本として『拳豪伝』（一九八八年、講談社）があります。これを漫画化したものは、横山まさみちの作画によって、同タイトルで一九九二年、講談社から出版されております。

(3)二〇一〇年十一月二七日に行われた二〇一〇年度「尾道学講座」第5回「尾道大学所蔵 下垣内文庫について」で講演。またほぼ同内容を拙稿「尾道大学所蔵 下垣内文庫について」（『尾道大学地域総合センター叢書5 尾道大学からの発信』所収。二〇一二年三月、尾道大学）に執筆しました。下垣内先生は二〇一二年八月五日、ご逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

(4)辞典・事典類への立項は、管見の限り以下のものに見出すことができませんでした。

『児童文学辞典』（一九七〇年、東京堂出版）、『児童文学事典』（日本児童文学学会編。一九八八年、東京書籍）、『日本児童文学大事典』第一巻（大阪国際児童文学館編。一九九三年、大日本図書株式会社）、『図説児童文学翻訳大事典』第2巻（二〇〇七年、大空社。オルツイ夫人編「紅はこべ」の翻訳作として）

(5)全集類としては他にも、一九四八年頃、ポプラ社より刊行された『高垣眸名作選』（当初は全四〇巻の予定であったもよう）がありますが、現在手に入りにくく、統一された書式という面はあるものの、セットとなった単行本、全集と言うよりも「シリーズ」といった様相もあるので、これらは次章の単行本に含めておきます。なお、『高垣眸名作選』の内訳は、架蔵本『銀蛇の窟（海の巻）』（一九四八年刊、八〇円）ならびに『まぼろし城』（一九四九年刊、八五円）所載の広告によれば以下の十五巻です。

1 『怪傑黒頭巾』、2 『まぼろし城』、3 『銀蛇の窟（山の巻）』、4 『銀蛇の窟（海の巻）』、5 『荒海の虹』、6 『鳴神峠』、7 『金竜水滸伝』、8 『夜光珠綺譚（都の巻）』、9 『夜光珠綺譚（錦の巻）』、10 『渦潮の果』、11 『怪異髑髏船』、12 『黒衣剣侠』、13 『紅魚喇嘛（東洋の巻）』、14 『紅魚喇嘛（西洋の巻）』、15 『空を飛ぶ謎』。

一方、ポプラ社の刊行したシリーズ（広告には、吉川英治、江戸川乱歩、海野十三ら他作者による書物と並べ載せられ、「探偵冒険」の名でまとめられています）として、同じく架蔵の『火の玉王子』（一九五三年刊）、『疾風月影丸』（一九五五年刷）、尾道市立大学蔵『疾風月影丸』（一九五三年刊）、『青銅髑髏の謎』（一九五五年刊）所載の広告によれば、上記のものと同重複しながら、『怪傑黒頭巾』『まぼろし城』『銀蛇の窟（山の巻）』『銀蛇の窟（海の巻）』

『大陸の若鷹』『荒海の虹』『疾風月影丸』『竜神丸』『青銅鬮の謎』『黒潮の唄』『豹の眼』『黒衣剣侠』『火の玉王子』『謎の象牙簪』『怪奇黒猫組』が挙げられておりますが、装丁が異なり、また値段が二〇〇円から一六〇円に設定されていることから、別のシリーズと考えてよいかと思われま。

(6) 例えば、尾道市立大学蔵の『疾風月影丸』の刊記には「昭和二十八年九月三十日印刷 昭和二十八年十月五日発行」との記載があります。一方、架蔵の『疾風月影丸』の刊記には「昭和三十年七月二十日印刷 昭和三十年七月三十日発行」とあります。両書はともにポプラ社から出たものであり、他に刊記に記される著者名、発行者名、印刷者名、印刷所名、発行所名は全て同じです（架蔵本には発行所のポプラ社の住所に、本社の他、営業所が加わっている点が、尾道市立大学蔵本とは異なっています）。活字を比べてみても、まったく同じもの。ただ、これも刊記に記されているのですが、製本所が、尾道市立大学蔵本は「富士製本」とあり、架蔵本は「粕谷製本」とある点が違っております。つまり、それぞれ印刷年月日が記されているだけ、と考えるべきであり、近世までの版本書誌学における「刊」（版木が作成された時。通常、初めて印刷される時と考えられる）、「印」（実際にその書物が印刷された時）の關係、現代で言えば「版」と「刷」の關係が示されているわけではないのです。同様の例が架蔵の『水滸伝物語』（高垣眸著《翻訳》、世界名作全集55）二点でも見受けられ、今、仮にこれらをA本、B本としてみますと、A本には「昭和二十八年八月十五日初版発行 昭和二十八年九月十日印刷、昭和二十八年九月十五日再版発行」「定価二〇〇円」著者 高垣眸」「発行者 野間省一（藤沢注・住所等は省略します。以下同）」「印刷者 山元正宜」「発行所 株式会社 大日本雄弁会講談社」「宮崎製本」とあります。一方、B本には「昭和

三十五年五月十日発行」「定価二〇〇円」「訳者 高垣眸」「発行者 野間省一」「印刷社 星野経男」「印刷所 星野精版株式会社」「発行所 株式会社 講談社」「大製製本」とあります。この刊記の頁はまったく違う版で印刷されているのです。ところが、印刷所も製本所も違うにもかかわらず本文の活字はどう見ても同じもの。これはどういうことなのか、当時の出版の仕組みを理解できていない私にはよくわかりません。

(7) 『日本児童文学大系 20 山中峯太郎 高垣眸』所載の、磯貝勝太郎氏作成の「高垣眸年譜」、また『少年小説大系 第5巻 高垣眸集』所載の、高橋康雄氏による「高垣眸 年譜」を参照しました。しかし、諸本を調べてみると、この年譜に未掲載の書籍があつたりします。こうした年譜のさらなる充実も今後の課題でしょう。

(8) 『日本の古本屋』でしか調べていませんが、他にネット上でのオークションなども行われているので、そちらの方面でも出品されているかもしれません。

#### 補記

本稿は、「二〇二一年度 尾道学講座」（第2回）として一〇月五日（水）にお話しした内容をもとに作成したものです。



『疾風月影丸』カバー表紙（1955年、ポプラ社） 同左 本体表紙（1953年、ポプラ社）



偕成社より出版された翻訳小説。左より『紅はこべ』『恐竜の足音』『ゼンダ城の虜』



『少女俱樂部』1938年7月号付録  
『新版大岡裁き 謎の花簪』



翻譯『牢獄の天使』（1949年、東光出版社）



『少年クラブ』1959年9月号付録  
『ジャガーの目』（漫画）



『ダイアナの瞳』（1949年、偕成社）



『まぼろし城』(1949年、ポプラ社)



同左 口絵



高垣暉作品は漫画化  
されることも多い。